



講座のアピールポイント

前立腺センターでは、前立腺疾患特に♂前立腺癌の新たな診断法や治療法に関して、企業や他施設と共同して、研究を行っています。

前立腺癌は現在日本人男性が罹患するがんとしてはもっとも頻度の高いものです。

診療のは

- 1) 診断
- 2) 治療

外科的治療：手術用ロボットda Vinciによる手術が行われます。

放射線治療：小線源療法とIMRTによる外照射が行われます。

薬物療法：主に男性ホルモンを抑えることを目的とするホルモン療法と、癌細胞を直接殺傷する抗がん剤があります。その他、放射性物質を注射してそれが骨の転移部位にあつまり、骨に転移した癌細胞のみを攻撃する治療もあります。

前立腺センターは独立した外来を持たないため、診療科としては泌尿器科になりますが、以下に示すような新規治療薬の国際共同試験を数多く手がけています。

新規ホルモン剤（NHA）後に進行した転移性去勢抵抗性前立腺癌（mCRPC）の化学療法未治療患者を対象に、MK-3475、ドセタキセル及びプレドニゾンの併用投与をプラセボ、ドセタキセル及びプレドニゾンの併用投与と比較する二重盲検無作為化第Ⅲ相試験（KEYNOTE-921）

一剤の新規ホルモン剤（NHA）及び化学療法が無効となった転移性去勢抵抗性前立腺癌（mCRPC）患者（相同組換え修復異常は問わない）を対象に、ペムブロリズマブ（MK-3475）とオラパリブ（MK-7339）の併用投与をアピラテロン酢酸エステル又はエンザルタミドと比較する非盲検無作為化第Ⅲ相試験（KEYLYNK-010）

転移性ホルモン感受性前立腺癌（mHSPC）患者を対象に、MK-3475とエンザルタミド及びアンドロゲン除去療法の併用療法をプラセボ、エンザルタミド及びアンドロゲン除去療法の併用療法と比較する二重盲検無作為化第Ⅲ相試験（KEYNOTE-991）

講座研究紹介

講座独自の研究

1. 前立腺アンドロゲン除去療法による骨強度動態検出における超音波骨密度測定器LD-100の有用性：ホルモン療法を施行すると徐々に骨強度が低下し、場合によっては骨粗鬆症になります。そのため、骨密度測定器で骨の密度を測定するのですが、正確に測定できる従来の機械はX線を使用するので放射線被曝が避けられませんでした。LD-100は超音波で測定するため放射線被曝の心配がありません。また、骨の内部構造の強さなど新たな研究対照も広がります。



2. ホルモン療法による認知機能の動態に関する研究：従来の研究では男性ホルモンが低下することにより認知機能が下がることが報告されています。しかし、これまでの研究の認知機能測定は正確性に欠けるといった問題点がありました。また、近年新たなホルモン療法薬が続々と発売されているためこれらについては十分に調べられていません。本研究は最新の認知機能測定機器であるGazefinderを用いて、認知機能の変化を調べ、早期発見、治療につながることを期待されます。